

将来を展望しながら粘り強く学習に向かうことのできる生徒の育成(最終年次)

～他者との協働を重視した、問題解決的な指導の方法についての研究～

光富 友希

Yuki MITSUTOMI

概要

2年次研究では、副題を「レディネス学習を取り入れた、問題解決的な学習指導の方法についての研究」とし、「学びと実生活のつながり」や、「学習内容同士のつながり」を通して、身の回りの生活にとどまらず、習得した知識・技能を家庭や地域・社会で生かすことのできる生徒の育成を目指した。その結果、課題を見いだす前に、課題に関する正しい知識・技能を習得したり、生活や社会の現状を正しく理解したりすることで、課題を自分事としてとらえ、家庭や地域社会の中で家庭科での学びを生かしていくための基盤となる主体性を育むための一端を担うことができた。最終年次研究では、他者と協働的な学習を進める中で、個人の振り返りの方法を工夫し、生徒の非認知能力を高める工夫を施すことで、主体的に学習に取り組む態度を育成し、ひいては質の高い学びを実現することが出来ると考えた。

キーワード：協働的な学び、非認知能力、主体的に学習に取り組む態度

1. はじめに～研究の目的

中学校学習指導要領(2017年7月)の総則編において、予測困難な現代社会では、一人一人が持続可能な社会の担い手として「様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し情報を再構築するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすること」と示されている。子供達を取り巻く環境は年々変化しており、それに合わせて子供達が自身の力で未来の社会を切り開いていくための資質・能力を確実に身に付けることが一層求められている。

家庭分野では、質の高い学びを実現するために、「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住に関する実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造する資質・能力」を育成することが求められている。「生活の営みに係る見方・考え方」は家庭科の学習内容を横断的に貫いており、それらを働かせ、よりよい生活の実現に向け考察することで、生活を包括的に捉え、生きる力を身に付けることができると考えられている。また、生徒自身が身近な生活の課題を主体的に捉え、課題発見、解決方法の検討と計画、実践、評価・改善という一連の学習過程を繰り返すことにより、予測困難な時代を生き抜いていくために必要な、資質・能力を身に付けていくことが重要であると言える。

2. 生徒の実態(2年次研究の成果と課題)

本校家庭分野の2年次研究では、生徒の学習意欲を引き出す内発的動機付けの工夫や、問題解決を促す3つの問いの工夫をしてきた。その結果、多くの生徒が課題を自分事と捉え、課題解決へ向けて意欲的に授業に臨んだり、根拠を明確にもって自分の意見や考えを述べたりする姿が見られた。さらに、3つの問いを通して、問題解決の手順を踏むことで、取り組むべき課題が明確になり、仮説や根拠をもちながら問題解決に臨む生徒が多く見られた。

また、本校家庭分野では、今年次の研究において、学習前の生徒(第2学年、調査生徒101名)を対象に「家庭科の学習について」のアンケートを4件法で実施し、以下のような結果が得られた。

項目	4	3	2	1
①仲間との交流は課題を解決することに役立っていますか。	82%	17%	1%	0%
②他者とのコミュニケーション能力を高めると感じていますか。	64%	29%	7%	0%
③課題に対して最後までやり遂げる力を高めると感じていますか。	78%	20%	2%	0%
④問題解決をする際に自分の学びを生かしながらよりよい方法を考える授業になっていますか。	84%	15%	1%	0%
⑤自分の成長が実感できる授業になっていますか。	65%	27%	7%	1%

【4とてもそう思う。3少しそう思う。2あまりそう思わない。1全くそう思わない。】

以上の結果から、ほとんどの生徒が既習事項を活用しながら意欲的に学習に取り組んでいることがわかる。一方で、②⑤の項目は他の項目に比べて低い結果となった。仲間との交流が課題を解決することに役立っていると回答した生徒が多いのにもかかわらず、コミュニケー

ション能力の高まりを感じている生徒は他の項目より減少しており、他者と交流はしているが、話し合いのスキルを向上させることによってより効果的な他者との協働が生まれると考える。また、自分の成長を実感していない生徒も一定数いる。「何が出来るようになったのか」等を実感させることは、生徒自身が、学びの価値や意義を理解し、学びへの必要感を得ることができ、次の学びへとつなげていくために重要であると考え。ひいては、予測困難な時代を生き抜いていくために、自ら答えを見いだしていこうとする態度を育成するために重要である。

これらの調査や普段の授業の様子を踏まえて、以下のような課題が見えてきた。

- ・学習に意欲的に取り組んでいるが、学習課題に対して、自分の生活や将来を展望しながら粘り強く「よりよさ」を追究し、学びを深めることができていない。
- ・問題解決の際に、他者との協働が課題の解決に十分な効果をもたらしていない。

以上のことから、生徒が学習に対して、自分の将来を展望する中で、自己を調整しながら粘り強く取り組むことのできる態度を育むことが肝要である。また、生活経験や個性の異なる人同士が、協働しながら問題を解決することで、新たな視点や発見が生まれ、学習が深まっていくと考える。

2. 1. 目指す生徒像

本校家庭分野では、以上の課題や求めを踏まえ、最終年次研究の目指す生徒像を以下のように捉え直した。

- ・自己の学びを振り返りながら、粘り強く追究できる生徒
- ・自己の個性を生かしつつ、他者と関わることで、よりよく問題解決できる生徒

3. 研究主題及び副題

最終年次研究では、本校の生徒の実態を踏まえた上で、学習指導要領で求められている家庭分野の資質・能力を確実に育むための研究を進めていく。

よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造するためには、生徒自身が自分の生活の中から課題を見付け、実生活の場でこれからの社会変化や自分自身の生活を展望し、実践と評価、改善を繰り返していくことが不

可欠である。

以上のことから、本校家庭分野の最終年次研究の主題と副題を以下のように設定した。

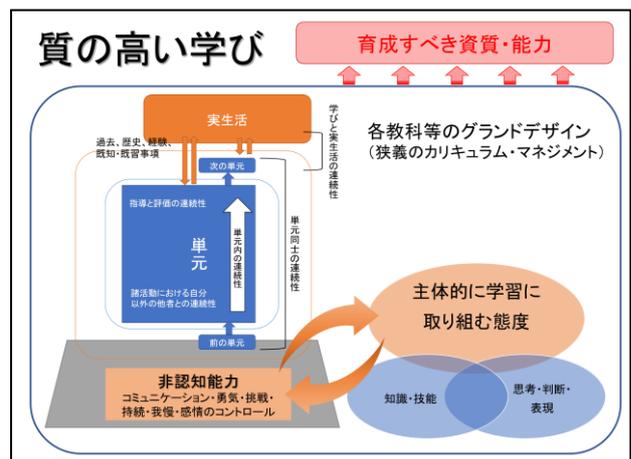
将来を展望しながら、粘り強く学習に向かうことのできる生徒の育成(最終年次)
～他者との協働を重視した、問題解決的な指導の方法についての研究～

4. 研究の内容と方法

本校の最終年次研究においては、生徒の実態やこれからの時代の潮流を踏まえ、引き続き「質の高い学び」に向かうために、単元や題材における「連続性」、さらには高めたい「資質・能力」を踏まえた題材の全体構想(以下、グランドデザイン)というものを設計することが重要であると捉えている。

なお、本校研究の概要にもある通り、このグランドデザインにおいて特に重要視しているのは「主体的に学習に取り組む態度(≒非認知能力)」へのアプローチである。主体的に学習に取り組む態度は、学びに向かう基軸となるものであり、その高まりがさらに質の高い学びを生み、ひいては各教科等における資質・能力の育成につながるものと考えられるためである。

これらのことを踏まえた本校の最終年次研究の構造図は以下である。



本校最終年次研究の構造図

この中で、本校技術・家庭科(家庭分野)では、特に「主体的に学習に取り組む態度の育成と評価」及び「非認知能力の育成」に焦点を当て実践研究を進めていくことにした。これらが、「2. 1.」で示した目指す生徒の育成に向かう上で特に重要な視点であると考えたためである。

4. 1. 3つの視点を軸とした振り返り

「質の高い学び」を実現させるためには、生徒の非認知能力を高め、主体的に学習に取り組む態度を着実に育成することが重要である。

本研究においては、授業の最後にワークシートを用いて振り返りを行う際に、3点の視点から振り返らせる。その3点は以下の通りである。

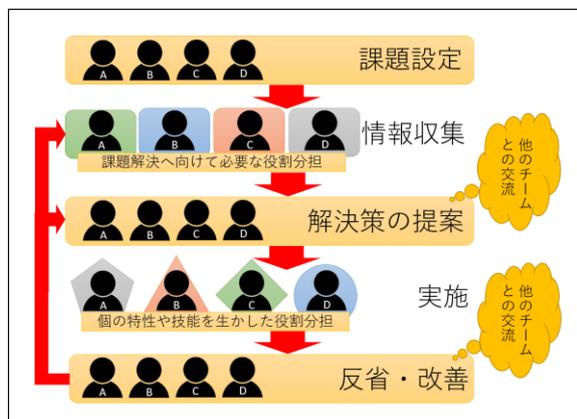
- ①課題解決のための自分の取組について
- ②課題解決のために必要な仲間との関わりについて
- ③課題を解決するために今の自分に足りないこと

これらの問いは、総論に記されている通り、①は自分と向き合う力、②は他者につながる力、③は自分を高める力に該当する。①の問いは、生徒が課題に対してよりよさを追究して取り組むことができているかを振り返るためのものである。②の問いは、自分が他者のために、集団の一員としてどのような取組をしたのかを記述させる。③の問いは、問題解決に対する軌道修正や新たに必要になった知識など、より問題解決の精度を上げるためにどのように調整していくかを確認するためのものである。この3つの視点で毎時間振り返り、それを次の授業の初めに確認してから授業に臨むサイクルを繰り返すことで、生徒自身が自然と自己の学習を振り返りながら学習に臨むことができ、主体的に学習に取り組む態度が育成されるのではないかと考える。

4. 2. チーム学習の手法取り入れた問題解決的な学習の工夫

本校家庭科の最終年次研究では、前述の通り、「他者との協働」を通して、自分の生活や将来を展望し、「よりよさ」を追究しながら問題を解決して能力の育成を目指している。そうすることによって、自分の個性を發揮しつつも、他者との関わりを通して深い学びを実現できる生徒の育成につながると考えたからである。

本研究では、一連の問題解決を3から4人のチームで取り組む。概要は以下のとおりである。



本校研究におけるチーム学習の構造図

問題を解決するために必要な役割分担をチーム内で決める。一人一人の役割は、独立しているように見えるが、問題解決をする際に、それぞれの持っている情報や技能を掛け合わせることでよりよい課題解決に向かうのではないかと考える。さらに、チーム内での協働にとどまらず、定期的にチームの枠を超えた協働を取り入れることが、質の高い学びへとつながると考える。これが、本研究で提案する「チーム学習」である。

このようにチーム学習を取り入れた「協働的な学び」に取り組むことで質の高い学びが実現されれば、互いに価値を認め合い、自己の個性を生かしつつ、よりよく問題解決できる生徒の育成につながると考える。

5. 実践と考察

題材名「持続可能な食生活とは？～旭川の4つの食材を使って無駄なく調理しよう～」

5. 1. 題材の構想

本稿「2. 生徒の実態」で述べたように、本研究の対象である第2学年の生徒に対し、「家庭科の学習について」のアンケートを行ったところ、他者とのコミュニケーション能力を高めることや、授業を通して自分の成長が実感できる授業構成にすることが課題であることがわかった。

本題材では、習得した知識・技能を活用しながら、旭川市で栽培されている中でも特に廃棄が多く出てしまう4つの食材の中から1つを選び、その食材を最大限に無駄なく活用するためのレシピを考える活動を中核に据えている。「捨てられてしまう作物を活用する」という環境に配慮する視点や個人の生活経験、既習事項と関連させることなどを踏まえてレシピを工夫する中で、「よりよさ」を追究しようとする態度を育成することを目指す。

なお、本題材で講じた手立ては主に以下の2点である。

①3つの視点を軸とした振り返り

本題材では、本稿「4. 1.」で述べたように、毎時間3つの視点から振り返りをさせることとした。3つの視点は以下の通りである。

〔3つの視点〕

- ①課題解決のためにどのように取り組んだか
- ②仲間と共にどのように取り組んだか
- ③課題を解決するために新たに必要になったことや見えてきた課題

この3つの視点に着目することで、生徒自身が適切に自己の学習を振り返りながら学習に臨むことができ、主体的に学習に取り組む態度が育成されると考える。

②チーム学習の手法取り入れた問題解決的な学習の工夫

本校の研究である非認知能力について、他者との効果的なコミュニケーションを取ることができるように、先に示した「チーム学習」をベースに学習を進めた。

チームで同じ課題の解決に向かって取り組むが、必ず個人思考させ、自分の考えを明確にしてからチームでの話し合いを行うことで、活発な意見交流ができるように工夫した。またチーム内にとどまらず、チームの代表者が進捗状況を全体に発表したり、ジグソー方式で、他のチームとの交流を取り入れたりすることで、より多くの人とコミュニケーションを取る場面を意図的に設け、お互いが高め合いながら課題の解決へ向かうことのできるようにした。

なお、本題材のおおまかな流れは以下の通りである。

時	学習内容	評価規準
1・2	○「旭川の農産物と地産地消について」 旭川市農業振興課 澤田さんの講話 ○「冬季野菜の生産とロスの活用について」 農家 守屋さんの講話 ○「炊くだけじゃない！お米の可能性」 「旭川産寒締めほうれん草の調理実演」 下国シェフの講話と実演	知・思 態
3 (本時)	○題材を貫く課題を達成するためのチーム課題を設定する。【工夫①】【工夫②】	思・態
4・5	○レシピを考える食材を決める。 ○チームでレシピを1つ考える。 (考案したレシピは冬休み中に作る) 【工夫①】【工夫②】	態
6~8	○家で作った料理を交流し、下国さんへの質問を考える。 ○下国シェフからアドバイスをもらう。 ○レシピの改善案を考える。 (考案したレシピは次の授業までに作る) 【工夫①】【工夫②】	知・態
9・10	○作った料理を個人で振り返る。 ○これまでの学習をチームでレポートにまとめる。 【工夫①】【工夫②】	思・態
11	○レポートを交流し、今後の生活に向けて考えたことを個人でまとめる。	知・思 態

5.2. 授業の実際

本題材はレシピ作成、調理、改善の一連の流れを2サイクル行った。第1時～第2時は、シェフや農政課職員、農家を招き、食生活に関わる課題や現状についての講話をしていただいた。また、実際に食材を無駄なく使うというテーマで調理実演をすることでこれから生徒が取り組む「持続可能な食生活にするためには？」という題材を貫く課題に対してのプロトタイプやプロの調理する姿を見たりすることで、学習への意欲を高めるきつ

かけとなった。それらを参考に、第3時では、チーム課題を設定した。

第4時からはチーム課題の解決へ向かってレシピを作成した。作成したレシピは、冬休み中に家で実践し、クログブックで写真や動画で記録させた。振り返りの際に他の班員との結果を比較しやすくするためである。第6時では、作った料理が課題を解決するために適切なものであったかを振り返った。このサイクルをもう一度繰り返し、解決策の質の向上を目指した。また、自分たちの振り返りに加え、シェフとの対話を通し、レシピを見直すことで学びの深化を図った。

最後に、これまでの学習をチームでレポートにまとめ、発表をし、個人での学びの振り返りを行い、一連の題材を終了した。

5.3 結果と考察

以下はチームで作成したスライドで学習のまとめを記載したものである。



まとめ

私たちは、この学習を通して、全体のテーマ「持続可能な食生活」と自分たちのテーマ「アレルギーなど様々な事情で食べられない人が食べられるような工夫をしよう。そして、食品ロスを減らそう。」を達成するためにさつまいもをまるごと使ったレシピを考えたり、アレルギーがある小麦や牛乳、卵の代用品を使ったりした。特に小麦粉は、旭川で生産が盛んな米からできた米粉を代用し、地産地消にもつなげることができた。

調理では、その食材の処理の仕方や使い方を工夫することで、ただ食材を調理するよりもその食材の良さをもっと引き出したり、より良い食生活に繋がれることがわかった。



まとめ

- ・【規格外商品や食品ロスなどをなくすためには】という課題に対し、その食品単品で食べるのではなく、他の食材と組み合わせたり調理方法方法を工夫したりして、その食品をどうしたら美味しく食べることができるのかと考えることが大切だと学ぶことができた。
- ・芯や種など普段なら使わない部分も、今回の授業で工夫して使うことで美味しくなり、食品を無駄にすることがないということも学ぶことができた。しかし、どうしても食べられない部分も食材にはあるので、食べる以外での活用も考えられたらいいと思った。
- ・少しの調理法の違いで美味しさが変わるのて細かいところまで気を配る必要があると知ることができた。

○全体を振り返って

普段使うことがない芯や皮のおいしさや栄養も含めて調理方法を考えることができた。

はじめは、芯や皮を使う料理なんて普段使うところではないから難しいと思っていたが、意外にもたくさんの活用の仕方があることがわかりこれからは生かしたい。また、その中で課題を見つけ、行き詰まったところをメンバーや下国シェフと話し合うことで、味以外の「おいしさ」についても、追求することができた。

不要なところがあるのは、りんごだけではないので、これからもいろんな食材を無駄なく美味しく調理する方法を考えていくことで、作ってくれた方々に感謝の気持ちを届けられると思った。

これから、毎日食事をする際には今回考えた食の大切さや様々な食材のおいしさを思いながら、食べていこうと思った。

どのチームも、「持続可能」という言葉を多面的な視点からとらえ、少しの工夫や考え次第で「持続可能な

食生活」にするために自分たちにもできることがあるということを学ぶことができた。

また、授業前に行ったものと同様のアンケートを授業後にも行ったところ、以下のような結果になった。

項目	4	3	2	1
①仲間との交流は課題を解決することに役立っていますか。	92% (+10)	7% (-10)	1%	0%
②他者とのコミュニケーション能力を高めると感じていますか。	79% (+15)	21% (-8)	0% (-7)	0%
③課題に対して最後までやり遂げる力を高めると感じていますか。	80% (+2)	19% (-1)	1% (-1)	0%
④問題解決をする際に自分の学びを生かしながらよりよい方法を考える授業になっていますか。	84%	16% (+1)	0% (-1)	0%
⑤自分の成長が実感できる授業になっていますか。	79% (+14)	20% (-7)	1% (-6)	1% (-1)

【4とてもそう思う。3少しそう思う。2あまりそう思わない。1全くそう思わない。】
※()内の数値は、事前に行ったアンケートとの増減を示している。

他の項目より低い値を示していた②と⑤においては大幅な上昇が見られる結果となった。

質問②に対しては、なぜそう思うのかを具体的に記述させたところ、以下のような回答が見られた。

- ・今回のようなチームで考える作業を伴うような活動では特にコミュニケーションを取らなければスライドやメニュー、また、発表まで完成しないし、その他での場面での意見の交流の際にもコミュニケーションを取ることが必要になってきて、コミュニケーションを取っていくうちに高まると思うから。
- ・自分たちが与えられた課題をより深めるために、他の人と交流する場が多く、自分の意見をよりわかりやすく相手に伝えようとするとき、相手とコミュニケーションが取れているなと思ったり、授業を重ねていくにつれて話し合いがスムーズになっていくなと思ったため。
- ・みんながそれぞれ面白い意見を持っていて、家庭科ではそれを多様な手段で交流したり活用したりできるから。

【生徒の記述より、抽出して記載】

これらの記述から、コミュニケーションを取らなければいけない状況を意図的に設けることで、自然と他者との関わりが生まれ、それを継続させることで、質の高い関わり合いができるようになったことが読み取れた。

また、②の値の上昇に伴い、①の値も上がっていることから、本実践における他者との交流は、課題を解決するために効果的なものになったと言える。

質問⑤に対しては、どうしてそう思うのかを具体的に記述させたところ、以下のような回答が見られた。

- ・技術的に学習する前と後ではできることや考え方が大きく変化するから。
- ・周りの人と協力して活動を行うことが嫌ではなくなったから。

・今回だと一回目の料理を生かして、二回目を行うため、料理の時間の配分などの手際も良くなるし、食材の切り方などの効率よく行うことなどのことができるようになるから成長を実感しやすいと思った。

・最初の考えよりも他の人との交流を通して、新しい考えを持つようになったりするから。

・授業のときに出された課題に対してできないと思ってしまいうちもあるけれど、授業を終えたときに実際に家庭でできそうと思える様になったり、生活で活かしているから。

・一年生の頃にやった学習内容が応用されていることが多々あるので、一年生で学習した内容が一年生の頃に比べて考えが深まっていると、成長したと感じます。

【生徒の記述より、抽出して記載】

これらの記述から、生徒が成長を実感するには、「できなかったことができるようになる」「新しい考えが生まれる」「生活で活用できた」などがキーワードとしてあげられることがわかる。本実践では、以下のような振り返りシートを使用し、チームの一員としての役割を果たしているかや、課題解決への過程を振り返るなど、非認知能力の自分と向き合う力、他者とつながる力、自分を高める力に該当する内容の振り返りを行ってきた。

日時	学習課題	①今日の授業の自分の取組について	②仲間と共にどのように取り組んだか	③グループ課題を解決するために新たに必要になったことや見えてきた課題
12月19日(月)	料理可能な食品の活用と調理器具の活用	4人1組で調理器具の活用方法を発表し、チームの意見を聞き合うことができた。	5人1組のグループで話し合いながら、調理器具の活用方法を話し合った。	
12月21日(水)	使用可能な材料を決定し、レシピを完成させる	選んだ材料、日時、調理器具の活用方法を話し合った。	調理器具の活用方法を話し合った。	この日、調理器具の活用方法を話し合った。

【授業で使用した振り返りシート】

アンケートの③の値の変動がほとんどないことから、1単位時間の質の向上には効果的だったかもしれないが、題材全体を通しての変容を生徒自身が実感するには至っていない。生徒が振り返りを通して自己や他者を見つめ、粘り強く課題に向かうことで成長を実感していくためには、題材によって適切な問いの検討が課題である。

6. 今次研究の成果と課題

本校家庭科では、今次研究の主題を「将来を展望しながら粘り強く学習に向かうことのできる生徒の育成」と掲げて研究をスタートさせた。

本稿では、これまで最終次研究について述べてきたが、以下に今次研究全体の成果と課題、および今後の新たな研究に向けての展望を述べる。

6. 1. 研究の成果

本校家庭科の今年次研究では、副題を「他者との協働を重視した、問題解決的な指導の方法についての研究」とし、自己の学びを振り返りながら、粘り強く追究しながら、自己の個性を生かしつつ、他者と関わることで、よ

りよく問題解決することのできる生徒の育成を目指した。

2年次研究では、人的資源を活用し、課題を見いだす前に、それらに関係する正しい知識・技能習得や、現状を正しく理解することで、課題を自分事としてとらえ、意欲的な学習態度につなげることができた。本実践においても、様々な人的に資源を活用し、知識・技能を習得しつつ、生徒がこれから取り組むプロトタイプを示すことで、生徒に学習のイメージを持たせつつ、学習意欲を継続させながら粘り強く学習を進めることができた。

チーム学習については、班員との関わりはもちろん、教員やシェフとの対話を設けたり、自分の役割を意識した上で授業に臨んだりすることで、必然的にコミュニケーションが生まれ、非認知能力の育成を担うことができたのではないかと考える。

また、3つの視点を軸にした振り返りでは、題材毎で生徒自信が探究の質を上げつつ、成長が実感できるような問いは検討の余地はあるが、生徒自信で自己を振り返り、よりよいものを追究していくための手助けになったのではないかと考える。

6. 2. 今次研究の課題と今後の展望

以上の成果があった今次研究であるが、その一方で課題もいくつか見られる。例えば、以下である。

①発達段階に応じた問題解決のレベルを設定すること

前述のように、本実践においては、生徒が課題に対して粘り強く向かうための意欲の高まりを確実に促すことができた。その一方で、生徒が課題設定から課題解決までを自ら学習を創造、調整しながら進めていくことが課題であると捉えている。生徒が自ら学習を創造・調整して、見通しをもって問題解決に臨むためには、生徒が問題を解決するための手法や、必要な知識・技能を身に付けている必要がある。そのためには、発達段階に応じて身に付けるべき資質・能力を明確にし、問題解決のレベルを調整する必要があると考える。例えば、1年生では問題解決の方法に焦点を当て、多くの方法の中から最適な方法を、根拠をもって選べる力を身に付ける。それを踏まえ2年生では、自分たちが取り組んだ問題解決は、自分の生活をよりよくする、または、社会的に価値があるものになったのかを検討させる。そして3年生では、さらに高度な問題に対して、自分で学習をデザインしながら学習を進めることができるようになることを目指す。このような手順を踏むことで、生徒が問題発見から、課題解決までの見通しをもち、学習の調整を図りながら、将来に生きる問題解決能力を育むことができるのではないかと考える。

②題材を通した評価

本実践においては、主にチームで課題に取り組んだ。その中で、個人で思考する場面を定期的に設けることで、班員との効果的なコミュニケーションを促し、チームとしての質を高めることができた。それがゆえに、いつのタイミングで何を評価するかを重要になってくる。集団の学びを個に落とすためには、育てたい資質・能力を明確にした上で、適切なタイミングで評価を行うことで効果的な学びになるのではないかと考える。

以上2つの課題から見えてくるのは、中教審答申に「令和の日本型学校教育」を着実に進めるように示された必要性である。変化が予測困難な時代を生き抜いていくためには、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要」と述べられている。また、その実現において、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を往還させ、学習者に資質・能力を確実に育む必要があると示されている。本校研究が目指すところと、この「令和の日本型学校教育」との親和性は極めて高いと考えている。

以上のことから、今後の本校における家庭科の研究においては、将来に生きる資質・能力を確実に定着させるべく、質の高い学びを保証するとともに、引き続き、学習の基盤となる「主体的に学習に取り組む態度」の育成について考え、実践していく必要があると考える。

参考文献・論文

- (1)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(66)」
- (2)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(67)」
- (3)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(68)」
- (4)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(69)」
- (5)荒井紀子。「SDGsとカリキュラムデザイン—探究的で深い学びを暮らしの場からつくる」。教育図書.2020
- (6)青井倫一。「通勤大学 MBA3 クリティカルシンキング」。総合法令出版.2002